

一般論文

# 特別支援学校（病弱）高等部での芸術科（美術）における遠隔授業

—ケーススタディを通して—

Online lessons of Art Education at Special School for Students with Health Impairments: A Case Study

丸山 顕

MARUYAMA Aki

(和歌山大学大学院教育学研究科  
教職開発専攻 2021 年度修了生)

古井 克憲

FURUI Katsunori

(和歌山大学教育学部)

受理日 令和 4 年 9 月 15 日

**抄録：**本研究の目的は、特別支援学校（病弱）高等部での芸術科（美術）における遠隔授業の実践過程及びその成果について、事例検討を通して明らかにすることである。事例となる生徒の高等部約 3 年間の遠隔授業について、観察記録や、生徒へのアンケート、生徒の作品、授業者による省察をもとに時系列に整理された。その結果、対象事例にとっての遠隔授業の成果として、(1) 身体的負担が少ない、(2) 身体動作の制約があっても実技を伴う美術教育は ICT を活用して実施可能である、(3) 作品の質の向上、制作の幅の広がり、が挙げられた。このような遠隔授業は、コロナ禍を背景の一つとして実施されたものの、それにかかわらず今後も、教育方法の選択肢の一つとして、教育内容、生徒各々の障害・病気の状況や、それに伴う身体的制約の変化、生徒の希望やニーズ、予想される教育成果を総合的に考慮した上で実施されていく必要がある。

**キーワード：**特別支援学校（病弱）、芸術（美術）、遠隔授業

## 1. 研究目的

文部科学省は、平成 27 年 4 月より、高等学校の全日制・定時制課程における遠隔授業〔教科・科目充実型〕を正規の授業として制度化した。対面により行う授業と同等の教育効果を有するとき、受信側に当該教科の免許状を持った教員がいなくても、同時双方向型の遠隔授業を行うことができるとしている。これにより、高等学校段階において、先進的な内容の学校設定科目や相当免許状を有する教員が少ない科目（第二外国語等）の開設、小規模校等における幅広い選択科目の開設等、生徒の多様な科目選択を可能とすること等により、生徒の学習機会の充実を図ることとされた。さらに、病室等における病気療養中の生徒等に対し同時双方向型の遠隔授業を行う場合の特例として、令和元年 11 月には受信側の病室等に当該高等学校等の教員を配置することは必ずしも要しないとされ、「2 文科初第 259 号の通知」（令和 2 年 5 月 15 日）により修得単位数の上限（36 単位）の算定に含めないこととする制度改正が実施されることになった。

このような背景のもと、本研究の目的は、特別支援

学校（病弱）高等部における芸術科（美術）の遠隔授業の実践過程及びその成果について、事例検討を通して明らかにすることである。丸山ら（2022）は、特別支援学校（病弱）X 校高等部における芸術科（美術）のハイブリッド型遠隔授業<sup>1)</sup>について報告している。そこではハイブリッド型遠隔授業の成果として、第 1 に、ICT の活用によって、個人制作はもとより、遠隔授業の受講生徒と対面授業の受講生徒（以下、遠隔生、対面生）との共同制作が可能となった点、第 2 に、対面生にも課題によってパソコンやタブレット型端末、スマートフォンの使用を可能とすることによって制作方法の選択肢が広がり授業への参加を促すことができた点が挙げられていた。一方、遠隔授業の課題として、生徒や家庭の ICT スキルによって授業内容や教員配置が異なってくる点、及び、教員配置がなければ素材や道具等に「触れる」機会を設定することが困難になる点が挙げられた。この「触れる」ことに関する課題については、遠隔生が「触れる」ことが難しい場合も、対面生の作品の鑑賞や、作品のデザインを行い、成型は他の者が代わりに行うことも可能であるため、「触れる」ということも含め、授業において、生徒各自にど

のような学びを残すべきなのかを明確にしていくことが必要であるとされていた。以上、丸山ら（2022）では、X校としてハイブリッド型遠隔授業の成果と課題について明らかにされているものの、実際に授業を受けた遠隔生に焦点を当てた検討は十分になされていない。ゆえに、本研究では、丸山ら（2022）の継続研究として、X校高等部で行われたハイブリッド型遠隔授業のプロセスと成果について、遠隔生の事例検討を通して明らかにする。

## 2. 研究方法

### 2.1. X校について

X校は、一学部、二学部からなる特別支援学校（病弱）である。一学部は隣接するY病院の重症心身障害児（者）病棟で入院している児童生徒を対象としている。二学部は、何らかの疾患によって医療機関を受診しながら自宅から通学している児童生徒を対象としている。二学部の児童生徒の疾患・障害は、発達障害の二次障害からくる不安障害、全身性の障害、血友病等の慢性疾患等である。

X校二学部の芸術科（美術）の授業は、選択制であり、1年生から3年生まで合同で、週1日2コマで設定されている。

### 2.2. 事例：Aさんについて

Aさんは、通常の中学校の肢体不自由特別支援学級からX校高等部の二学部に入學した。気管切開をしているため発声は困難である。自力での座位・立位は難しい。右手首より先を自力で動かすことが可能である。パソコンの操作に長けており、マウスを使用してチャットを行い、音声を出すこともできる。病気や感染症予防のため、高等部1年生より全教科、自宅で遠隔授業を受けた<sup>2)</sup>。Aさんを事例として選定したのは、X校で遠隔授業が開始されたのがAさんの入学をきっかけの一つとしていたため、そして、3年間の長期に渡りAさんが遠隔授業を受講していたためである。

### 2.3. 調査期間

調査期間は、Aさんが高等部1年生4月から3年生の1学期7月までとした。

### 2.4. データ収集及び整理方法

X校高等部の芸術科（美術）担当の教師である第1筆者による授業実践の省察、及び授業の参与観察記録を本研究でのデータとし、時系列に整理して記述する<sup>3)</sup>。なお、Aさんの授業への参加状況が分かるようにAさんの作品も載せる。

さらに、Aさんの3年生時で、美術の授業を選択した生徒に対して行ったアンケートと、1学期の授業の

感想について整理し、これまでの遠隔授業の実践についてまとめ、考察する。

## 2.5. 倫理的配慮

本研究を実施する上で、X校の校長に対して、研究の趣旨、及び生徒の匿名性の保持などプライバシーの保護、研究目的以外にデータを使用しない旨について説明し同意を得た。

さらに、Aさんを本研究で主要事例とすることについては、匿名性の担保及び研究目的以外にデータを使用しない旨を、保護者に書面及び対面で説明し承諾を得た。

## 3. 結果 I. Aさんが高等部1年生のころ

芸術科（美術）の授業は、高等部1～3年生まで、美術を選択した生徒3名（男子2名、女子1名）と、芸術科（美術）担当の教師1名で、週2限（木曜 5・6限 50分×2限）実施された。年間計画は以下の表の通りである。

表 3-1. 年間計画

4月	5月	6・7月	9・10月	11・12月	1・2月	3月
鉛筆画	水彩画	想像画	共同制作	コラージュ	陶芸	
鑑賞						

丸山ら（2022：2）

### 3.1. Aさんへの遠隔授業

芸術科（美術）担当の教師である第1筆者（丸山）が、授業前日までに鉛筆・紙等必要な材料を学級担任に渡してAさんの自宅へ届けられるようにした。Aさんの自宅はインターネットが接続できる状況にあった。遠隔授業に必要なものは、Aさん私物のパソコンと、学校が用意したパソコン、WEBカメラ、集音マイク、HDMI端子、延長コードであった。Aさんは本年度、美術の授業は全て遠隔で受講した。第1筆者は、ハイブリッド型遠隔授業として、X校で対面授業をし、Aさんへの遠隔授業も同時に行った。年間3回程度、美術の授業の際に学級担任の訪問があったが、それ以外に教師の同席はなく、Aさん一人で授業に参加していた。

### 3.2. 授業の過程と作品

Aさんは、夏頃までは、自宅で車椅子に座位で授業に取り組むことができていたため、対面とほぼ同等の授業内容であり、鉛筆等を手で用いて作品を制作していた。その後は、身体状況が変化したため、パソコンを用いた作品制作および、オンラインでの言語活動を重視した授業内容へと変更した。

### 3.2.1. 鉛筆画・水彩画

モチーフは、対面生・遠隔生ともに、生徒一人一人が選択して設定して描いた。

Aさんは、美術の授業中、車椅子座位が継続できた。はがきサイズの紙であれば自力で紙を動かし、鉛筆で描くことが可能であったため、はがきサイズのデッサンを多く行った。本課題では、光の量や方向を制限してデッサンを行った。Aさんは、光や陰影を意識して描いていた。授業終わりには、生徒同士で相互評価や、芸術科（美術）担当の教師が講評を行った。

### 3.2.2. 想像画

特殊技法（デカルコマニー、スパッタリング、マーブリング、ドリッピング、吹き流しなど）様々な特殊技法を体験し、二次的な創作につなげる課題に取り組んだ。意図しない色や形から想像を広げて、画面構成を行う。本課題では、マーブリングから浮かびあがった形から「蛇」という作品を制作した。使用する液体の色はAさんが選択し、芸術科（美術）担当の教師と対面生が教室でマーブリングを行った。後日、数枚のマーブリングの中から、Aさんが1枚を選択し、自宅で、その上から、鉛筆で描き足して作品を仕上げた。

### 3.2.3. 共同制作

ゼンタングルの制作を行った。1枚の絵を分割してゼンタングルの模様置き換えて描いた(16分割)。この授業の事前準備として、①模倣用絵画を複数準備し、選択する。②拡大コピー、分割が行われた。題材・描く部位の選択は、Aさんを含め、生徒間で話し合い、決定した。Aさんは車椅子座位で、ペンをを用いて描いていた。

### 3.2.4. コラージュ

モダンテクニックの手法を取り入れ、ドリッピング（吹き流し）を行ったあと、その作品も含めてコラージュを作成した。

Aさんは、ドリッピングは、車椅子座位で行ったが、コラージュは仰臥位で行った。ドリッピングは学級担任が訪問時に一緒に行った。学級担任の訪問時も授業は、遠隔で行い、やりとりはチャットを使用した。簡単な返事は視線でのやりとりが可能であった。

コラージュは、本人が好きな本（科学系雑誌）やタイム誌から、好きな写真を選択するようにした。台紙の色や写真の選択をし、芸術科（美術）担当の教師と共にやりとりしながら作品を完成させた。

## 4. 結果Ⅱ. Aさんが高等部2年生のとき

芸術科（美術）の授業は、高等部1～3年生まで、美術を選択した生徒8名（男子4名、女子4名）と、

芸術科（美術）担当の教師2名で、週2限（木曜 5・6限 50分×2限）実施された。昨年度より人数が2倍以上に増えた。対面生は、発達障害による二次障害や心身症のある生徒であった。

表 4-1. 年間計画

4月	5月	6・7月	9・10月	11・12月	1・2月	3月
		鉛筆画	デザイン	コラージュ	段ボールアート	鉛筆画
鑑賞						

丸山ら（2022）

年間計画は表4-1.の通りである。4月、5月は、新型コロナウイルス感染予防のためにX校は休校であった。段ボールアートを取り入れたのは、生徒の希望に添ったものである。

### 4.1. Aさんへの遠隔授業

芸術科（美術）担当の教師が、授業開始までに授業で使うPowerPoint、プリント資料をAさんのGoogle My driveに保存するようにした。アンケートや感想等のプリントもGoogle内で提出・共有するようになった。

遠隔授業に必要なものは、昨年同様Aさんの私物のパソコンと、学校が用意したパソコン、WEBカメラ、集音マイク、HDMI端子、延長コードであった。さらに、黒板の板書を常に見ることができるよう定点ビデオカメラが教室に常設置された。資料は画面共有しながら、教室と自宅で同時に見ることができるようにした。Aさんは本年度、美術の授業は全て遠隔で受講した。筆者は、ハイブリッド型遠隔授業として、X校で対面授業をし、Aさんへの遠隔授業も同時に行った。本年度からAさんの対応を主として行う芸術科（美術）担当の教師が1名増員された。年間3回程程度、美術の授業の際に学級担任の訪問があった。

### 4.2. 授業の過程と作品

#### 4.2.1. 鉛筆画

10H～10Bまでの様々な濃さや柔らかさの鉛筆を使用し、グラデーションを描く課題では、光の方向を決めて円に陰影を付けた。その後、墨でドリッピングまたはデカルコマニーを行い、組み合わせで作品制作を行った。Aさんはパソコンアプリを使用し、グラデーションと円を組み合わせたり、WEB上で気に入ったドリッピング等の中から選択して組み合わせたりする等をして作品制作を行った。芸術科（美術）担当の教師からは口頭での助言のみであった。教師が行った手作業は、印刷・展示のみであった。

#### 4.2.2. デザイン

全国高等学校文化祭のポスター制作を行った。共通



のテーマからアイデアスケッチを繰り返し、作品構想を練った。アイデアスケッチの段階で途中経過を生徒どうして報告しあい、評価しあいながら制作を進めた。Aさんは、ジョウビタキやメジロなど鳥をモチーフにして、青空を背景に手を伸ばす、というポスターを制作した。第1筆者（丸山）は、説明がなくてもポスターの図柄を見るだけで思いが伝わるようなさわやかなポスターであったと感じた。この作品は、入選となった。

#### 4.2.3. コラージュ

単元のねらいは、「モダンテクニックを活用して作品制作を行う楽しみを知る」であった。また「話し合い活動を行い、共通テーマを考える」である。話し合いの手順は、事前にアンケートをとった資料の中から、ひとり1つは好きなもの、セリフ、歌詞、言葉等を答え、生徒どうして共有する。1つの言葉から、思い浮かぶものをつなげて、最終的に1つのイメージに辿り着くように設定して行った。様々な言葉や思いが出てきたが、皆で折り合いをつけながら、最終的に「明るい、あたたかい」イメージというテーマが決定した。Aさんは、芸術科（美術）担当の教師に依頼してデカルコマニーをともに行い、それを画像として取りこみ、コラージュ作品の下地とした。その上に好きな漫画や小説からイラストやセリフを重ね、作品としてのバランスを取る作業を行った。制作過程では、教師は画面構成への助言は行ったが、パソコン操作についてはとくに指導はしていない。

#### 4.2.4. 段ボールアート

段ボールアートの共同制作・手順について、下記の表に整理した。第1回目、対面生は、素材に親しむため、段ボールを切ったり、貼ったりしていた。Aさんはこの作業が困難なため、WEBで段ボールアートについて検索し、紹介できるように資料作成を行った。

表 4-2. 段ボールアート 共同制作・手順

	遠隔	対面
第1回 12/10	① 段ボールの素材等について、映像を見る。今後の予定を知る。 ② 段ボールアートの作品等をWEBで検索し、紹介できるようにパワーポイント(PP)、もしくは、動画編集を行う。	② 段ボールを切ったり、貼ったりして、素材に親しむ。
第2回 12/17	③ 遠隔授業の生徒が作成した動画を見る。教師からのPPを見る。段ボールを使って、どのような世界を作成するか、テーマを全員で考える。テーマに沿って役割分担を行う。(恐竜、カンブリア紀) ④ 決定したテーマの土台のデザインをする。	⑤ シダ植物等、時代や世界観に沿った物を考え、各々作成する。
第3回 1/14, 17	⑥ 打ち合わせを重ねながら、制作する。 ⑦ 作品講評 展示	

丸山ら（2022：3）

第2回目は、Aさんが作成した資料を対面生と見る機会が設定された。芸術科（美術）担当の教師の説明のあと、段ボールアートのテーマについて全員で話し合う時間がとられ、各生徒が作成に取り組んだ。Aさんはテーマの土台のデザインを、パソコンを用いて行った。第3回目には、生徒どうして打ち合わせを重ねながら、対面生が、Aさんがデザインした土台を作り、共同で作品を完成させた。

### 5. 結果Ⅲ. Aさんが高等部3年生のとき

高等部1～3年生まで、美術を選択した生徒9名(男子4名、女子5名)と、芸術科（美術）担当の教師3名で、週2限(木曜 5・6限 50分×2限)実施された。生徒人数は、昨年度と同程度であったが、芸術科（美術）担当の教師が年度当初から3名配置された。年間計画は以下の表の通りである。

表 5-1. 年間計画

4・5月	6・7月	9・10・11・12月	1・2月	3月
鉛筆画・水彩画	陶芸	デザイン	自画像	コラージュ
鑑賞				

丸山ら（2022：2）

#### 5.1. Aさんへの遠隔授業

芸術科（美術）担当の教師が去年度と同様の準備を行い、ハイブリッド型遠隔授業を行った。Aさんは、同様の課題を3年間、実施してきたが、パソコンで描く技術が進歩しており、作品の質は、技巧の面でも自分の思いを作品に反映する面でも向上した。生徒間には親しい関係が成立しており、チャットを通じてやりとりする様子もよくみられた。年間3回程度、美術の授業の際に学級担任の訪問があった。

#### 5.2. 授業の過程と作品

以下、Aさんの高等部3年生4月から7月までに行った授業の過程について表に整理する。

##### 5.2.1. 鉛筆画・水彩画

第1回目は、芸術科（美術）担当の教師が、静物デッサンについて説明し、今後の予定を伝えた後、生徒が話し合いでモチーフを決めた。そのモチーフのセッティングを教師や生徒間でのやりとりを通して考えたあと、実際に描く作業が開始された。Aさんは、パソコンを操作してモチーフを描いた。第2回目は、生徒がデッサンの途中経過を批評しあい、良いところを伝える時間が設けられた。その後、静物の形や質感を意識するよう教師から助言を受け、各自でデッサンを続けた。第3回目は、引き続き、制作が続けられた後、完成した作品の講評、批評が行われた。

表 5-2. 鉛筆画・水彩画

	遠隔	対面
第1回 5/6	①静物デッサンについて、PP等での説明。今後の予定を知る。	
	②・モチーフを決める。・教師や生徒間でやりとりをしてモチーフのセッティングを考える。・描く	
第2回 5/13	③前回のデッサンの途中経過を批評しあう。友だちの作品のよいところをみつけて、伝える。	
	④静物の形や質感を意識する。(着色する場合は薄い色から始める。)	
第3,4,5回 5/27 6/10, 17	⑤⑥⑦制作 ⑧作品講評 批評 まとめ	

丸山ら (2022:3)

## 5.2.2. 陶芸

表 5-3. 陶芸

	遠隔	対面
第1回 6/24	①陶芸について、PP等での説明。今後の予定を知る。	
	②・作ってみたい形を3Dで描く ・担当教師とやりとりをしながら、制作を行う。	②・陶土に触り、感触を味わう。 ・好きな小物を作る。
第2回 7/8	③土や陶芸についての説明を聞く。土練りと電動ろくろでの土殺しと成型のお手本を見る。土練りを一人ずつ行う。	
	④教師や生徒の成型の様子を観察する。自分が成型したい器のデザインを構想する。	④教師と一緒に電動ろくろ体験をする。
第3回 7/16	⑤ (②、④) の作品の仕上げを行う。	⑥作品講評 批評 まとめ

丸山ら (2022:3)

第1回目は、芸術科(美術)担当の教師が、陶芸について説明し、今後の予定を伝えた後、対面生は、陶土に触り、感触を味わう、好きな小物を作る時間が設定された。Aさんは、陶芸で作ってみたい形を、パソコンを使って3Dで描いた。そのあと、教師とやりとりしながら、Aさんが描いたものを教師が制作した。

第2回目は、ゲストティーチャーの説明後、土練りを行った。Aさんは、芸術科(美術)担当の教師が自宅に持参した土に触れた。対面生が芸術科(美術)担当の教師と一緒に電動ろくろ体験をしている間、Aさんは、教師や生徒の成型の様子を観察し、自分が成型したい器のデザインを構想した。Aさんのデザインをゲストティーチャーが成型した。

第3回目は、作品の仕上げが行われ、講評、批評、まとめの時間が設定された。

## 6. 実践のまとめ及び考察

以上、Aさんが1年生から3年生1学期までの実践過程について整理した。

Aさんが3年生の7月に、受講生徒に実施した一学

期の美術に関するアンケートのうち、Aさんの回答は以下の通りである。

- ・高1、2年の頃に比べると今年の方がうまくかけたと思います。パブリカの凸凹を表現するのが、すごく難しかったです。工夫点はいろんな色を合わせて色を塗ることです。ハイライトを意識して色を明るくしたり、暗くしたり、影の色使いもすごく難しかったです。
- ・リンゴとパブリカを自分が思った以上にうまく描けてよかったです。1年生の頃の鉛筆デッサンが懐かしいです。
- ・陶芸は手を汚したり、考えながら作るので、結構体力が必須だなあと思いました。
- ・器をプロの方に作って頂けたので、すごく嬉しいです!!! 器の形がすごく綺麗でした。

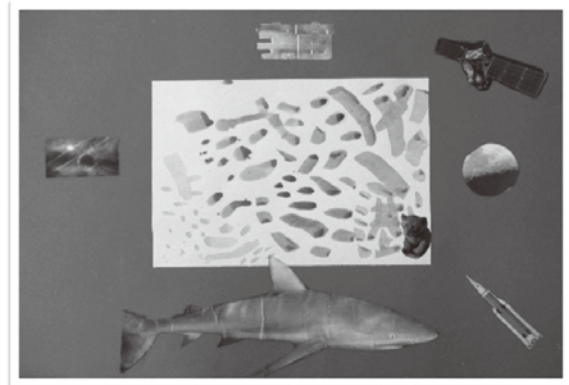


図 1. Aさんの1年生のころのコラージュ作品

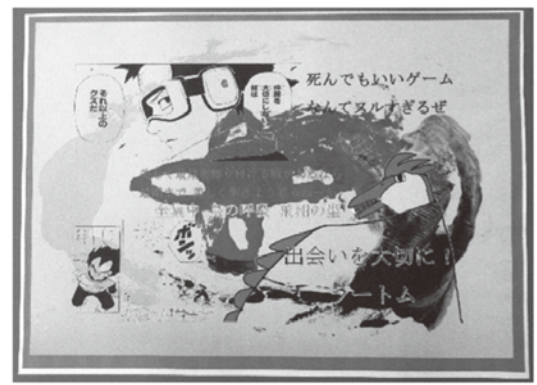


図 2. Aさんの2年生のころのコラージュ作品

以上のアンケート結果より、Aさんは、3年間の美術科での自分の成長を知り、達成感を得ているであろうことが感じられる。Aさんの1年時のコラージュ作品と2年時のコラージュ作品を比較検討すると、より明確に成長をみることが出来る。1年時はまだ遠隔授業がはじまったばかりであり、Aさんと芸術科(美術)担当の教師とのコミュニケーションの不足が否めなかった。遠隔で行う美術の授業には芸術科(美術)担当の教師とAさんの意思の疎通が必須であり、信頼関

係もまた必須である。当時は筆者も A さんも手探りの状態であった。しいては、遠隔で行われる学校生活自体がまだ軌道に乗っていなかったといえるだろう。コラージュ作品では、ドリッピングの部分で A さんが自分で直接、絵の具を使うなどの操作をする楽しみがあった。好きな雑誌から好きなものを選ぶことができ、貼る場所を決めることができた。意図した画面構成はなく、まんべんなく並べて貼っていた。「幼さと緊張」が垣間見えるが、そういったこともまたコラージュ作品の特徴である。

2 年時は遠隔で芸術科（美術）担当の教師と一緒にいったデカルコマニーを写真で取り込み、Google 内で共有して作品のベースとした。インターネット上からテーマに沿った自分の気になるもの、好きなものを検索して集め、切り貼りすることができた。トリミングや透過なども自分の思うように、また芸術科（美術）担当の教師からの助言も聞き入れながら軌道修正をすることができた。試行錯誤を繰り返すことができ、自然と画面構成へと繋がった。色彩構成も自由自在であった。絵の具を塗るといった技術的な関与がなくなったが、話し合いは生徒どうしや教師との間であることが増え、内容を深めることができた。作品には、自分の思いを強く出し、反映することができている。

1 年生の時の作品（図 1）と 2 年生の時の作品（図 2）を比較すると、パソコン操作の技術的な成長と教師とのやりとりの成熟、さらに、より自分の思いを反映できているという点で作品の質は向上し、A さんの成長が見られる。

## 7. 遠隔授業の成果

以上の結果より、A さんへの遠隔授業の成果として、(1) 身体的負担が少ない、(2) 身体動作の制約があっても実技を伴う美術教育は ICT を活用して実施可能である、(3) 作品の質の向上、制作の幅の広がり、を挙げることができる。

### 7.1. 身体的負担が少ない

A さんは、コロナ禍での病気療養のためほぼ全ての授業を自宅から遠隔で受講することとなった。そのため、往復通学にかかる 80 分程度、それに伴う準備時間等身体的負担を大幅に減らすことができた。これは大きな成果である。学校生活の在り方を問う形であったと思われるが、A さんや X 校としては自然な経緯であったように思われる。

A さんは 3 年間、ICT を活用して高校生活を登校生と共に過ごした。全教科を遠隔で受講し、各教科ではそれぞれの試みがなされてきた。修学旅行は、部分的に遠隔参加しながら、在校生に向けて、修学旅行速報ペーパーを作成しリアルタイムでの様子を伝えた。各

教科や行事の在り方の中で A さんやクラスメイトそれぞれに役割があり、学校生活が成立している。

### 7.2. 身体動作の制約があっても実技を伴う美術教育は ICT を活用して実施可能である

本研究の結果より、身体動作の制約が大きくても、実技を伴う美術教育は ICT を活用して実施可能であると考えられる。A さんの場合、可能な範囲で座位を取り、筆や鉛筆を使って制作することが身体状況の変化によって制約されたが、パソコンで全ての行程を行うなど、ICT の活用で作品の自由度があがったと言える。

### 7.3. 作品の質の向上、制作の幅の広がり

A さんの場合、ICT を活用した美術の遠隔授業を継続して受講することによって、作品の質は向上し、制作の幅は広がった。A さん自身も自らの作品の成長を感じている。また、自分で手を使って描くのではなく、芸術科（美術）担当の教師や他生徒に委ねて筆や絵の具を使用して作品の下地を制作することもあった。自分の持つイメージを伝えるために検索して画像や動画を提示することや、チャットでのやりとりが増えていった。このような言語活動を通して、A さんにとって、制作の幅の広がりが見られた。

## 8. おわりに

本研究では、特別支援学校（病弱）高等部での芸術科（美術）における遠隔授業の実践過程について、事例検討を通して、その成果について検討した。本研究では限られたデータをもとに実践過程について記述したため、対象事例の変化を詳細に描き出すことには限界があった。しかしながら、コロナ禍を背景の一つとして実施された遠隔授業において、本研究で示したような成果が認められた。今後も、特別支援学校（病弱）での遠隔授業は、教育方法の選択肢の一つとして、生徒各々の障害・病気の状況や、それに伴う身体的制約の変化、生徒の希望やニーズ、予想される教育成果を総合的に考慮した上で実施されていく必要があると考える。

### 注

- 1) 本稿では、遠隔授業について、自宅や病室といった学校から遠隔にいる児童生徒に対し、インターネットを介し ICT 機器（パソコンやタブレット端末等）を活用して行われる授業のことをいう。ハイブリッド型遠隔授業とは、遠隔授業と対面授業とを同時に行う授業のことをいう。
- 2) 入学当初は週 1 回程度、保護者付き添いのもと、登校して授業を受けていた。登校後は別室にて仰臥位で休憩（20 分）・座位で授業（50 分）・仰臥位にて休憩（20 分）放課後はクラ

スメイトとゲーム等して過ごす。仰臥位にて休憩の後、帰宅していた。

- 3) 第1筆者は、Aさんの芸術科（美術）の授業に3年間、芸術科（美術）担当の教師として関与している。

#### 付記

本稿は、丸山（2022）の一部を、古井が本稿の目的に沿って編集・構成し、丸山と共同で加筆・修正したものである。

#### 参考資料・引用資料

丸山顕（2022）、特別支援学校（病弱）における美術教育 — 高

等部での遠隔授業の実践を通して、和歌山大学大学院教育学研究科教職開発専攻 2021 年度修了研究報告。

丸山顕・江田裕介・古井克憲（2022）、特別支援学校（病弱）高等部における芸術科（美術）のハイブリッド型遠隔授業、学芸、No.68、1-4.

文部科学省（2015）「高等学校における遠隔授業〔教科・科目充実型〕」[https://www.mext.go.jp/content/20210514-mxt\\_koukou01-0000007812\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210514-mxt_koukou01-0000007812_01.pdf)、参照日 2022 年 5 月 24 日.

